

謹賀新年 令和七年 元旦

圓福寺報



圓福寺報 第九十号
令和七年一月一日発行
発行者 臨濟宗妙心寺派 圓福寺
千葉市稲毛区穴川町三七五 Ⅱ (二五二) 九一八一
https://www.chiba-enpukuji.com
E-mail: oshou@chiba-enpukuji.com

「無事は吉祥」
(ぶじこれきつしょう) 真のおめでたいことは、特別ことが起こるのではなく、何事もないことで、何事もないことはおめでたい事。



目次 頁
年頭法話
「〇〇なら、当たり前」
—— 仏道無上誓願成

「最強の二六二字『般若心経』」④
—— 広大な「空」の中で生きる

三巡目第十三回四国あるき遍路の旅

「四国八十八ヶ所を巡り終えて」
市原市 宮本 和敏さん

「僧堂で何してる？」番外

圓福僧堂龍潜庵老大師開堂式

寺院追悼茶会

—— 寺院宮田尚美を偲んで

九月の土曜会 栗拾いと古寺参拝

「八十歳初めての栗拾い」
幕張町 雨海 宏明さん

穴川花園幼稚園 園だよりから

「秋の風物詩？」

土曜会・写経会・坐禅体験会

令和七年年忌表

令和六年十月～十二月日録抄

第二駐車場のご案内

令和七年年間行事予定

花園会新年会のご案内

24 23 22 22 22 21 20 18 16 14 10

〇〇なら、 当たり前

ぶつどうむじょうせいがんじょう

仏道無上誓願成

令和九年に妙心寺第二世の興祖
微妙大師六百五十年のご遠諱を迎
えます。それに先立ち、今年おんきの四月
から予修法要がはじまり、令和八
年四月から翌令和九年三月三十
一日まで、正当の遠諱団参法要が
執り行われる予定です。また、微妙
大師のご命日に近い、令和九年三月
十五日〜二十六日の間の十日間
は、遠諱特別参拝期間として、全
国を区分けした教区ごとの大法要
が開催され、妙心寺派三千四百

余ヶ寺の檀家さんが本山に足を運
ばれます。

□□□少水の魚に楽しみ有り

五十年ごとの大法要です。遠
諱テーマが「少水の魚に楽しみ有り」
と決められました。これは、微妙大
師の数少ない遺品の中の墨跡からい
ただいた言葉だそうです。魚にとっ
て水は欠かせないものですが、その
水が少なくなっていくと、魚たちは
水面上がって来てアップアップして
苦しむ姿を見せます。この言葉の



微妙大師の揮毫された「少水の魚に楽しみ有り」の墨跡。

「魚」が私たち自身、そして「水」は
私たちの寿命を意味していると言わ
れています。歳をとって寿命が少な
くなると病気になったり、親しい人
が亡くなったたりして苦しむばかりに
なる所ですが、微妙大師は、少水に
も「楽しみ有り」とおっしゃいまし
た。

□□□にっぽん縦断こころ旅

NHKに「にっぽん縦断こころ旅」と
いう番組があります。俳優の火野
正平さんが、全国から寄せられた
お手紙をもとに、手紙を下さった方
の「こころの風景」を、自転車で訪ね
るといふ番組です。残念ながら、火
野正平さんが昨年十一月に亡くな
られたので、番組ファンとしては、番
組がこれからどうなるのか心配して
おります。その番組の中で、火野正
平さんはいろんな言葉を残していま
すが、その中の一つに、「人生下り坂
サイコー」という名言があります。
六十一歳から番組に出演して十四
年、歳と共に上り坂にあえぎ、一方



下り坂では疾走しながら「人生下り坂サイコー！」と、下り坂とご自分の年齢を重ねた名言が生まれました。切り上げたら七十歳の私の歩き遍路は、上り坂はもちろんあえぎ、下り坂は膝の痛みとももの筋肉痛に耐えながらですから、火野さんの「下り坂サイコー！」はうらやましい限りです。

この火野さんが遺した「人生下り坂サイコー」というのが、微妙大師がおっしゃった「少水の魚に楽しみ有り」を端的に表していると思います。そこで、遠諱のキャッチフレーズは、「いま、ここを生きるしあわせ」と、年齢にかかわらないその時その時のしあわせを大切に生きていこうという言葉となりました。

本山の大法要に限らず、一般的にビッグイベントとなると大会テーマであるとか、キャッチフレーズであると

かが決められるものです。繰り返して、テレビコマーシャルのように流行語になることもあります。

近年の流行語というと、年末の流行語大賞にノミネートされた言葉には初めて耳にするものも多く、それだけ人々の価値観が多様になってきたのかなと感じさせられます。以前の流行語は老若男女、国民のどれもが口にするようなものだったと思います。修行道場の老師が、「イケメン」なんていう流行語を口にされて、照れくさそうにされていたのを思い出します。

□□□友だちなら当たり前

そんなかつての流行語の中に、育毛剤のコマーシャルから広まった「友だちなら当たり前」という流行語がありました。頭頂部が薄くなった友だちに、薄くなってるよと忠告をするというシーンに続いて、後日、忠告してくれてありがとうという気持ちを持ちを伝えようとすると、「友だちなら当たり前」と友だちらしく

肩を組むのでした。友だちだからこそ、言いにくい事もきちんと言ってあげられる、当たり前じゃないかというのです。

この「当たり前」の話には後日談があつて、東日本大震災の後、このCMに出演していたプロサッカー選手のアルシンドさんが、かつてチームメイトだった岩手出身の小笠原選手の地元で慰問に行ったそうです。小笠原選手が「遠くまでゴメン。」と頭を下げると、アルシンドさんが声を荒げて、「ゴメンとか次に言ったら怒るぞ。友だちなら当たり前！」と言ったのだそうです。

頭頂部が薄くなったアルシンドさんが、「アルシンドになっちゃうよ。」と忠告したことで大受けした「友だちなら当たり前」という流行語が、感動する言葉に変わった瞬間だったと言われています。

□□□あたりまえ

私たちは、この「当たり前」という言葉を、普段意識せずに使っているような気がいたします。「そんなの

当たり前じゃないか。」「当たり前だ
 と思う。」「ごく当たり前。」「少し乱
 暴な言葉だと、「当たりめーよ。」「さ
 らに、「親だったら当たり前。」「男
 なら当たり前。」「など、私たちの身
 の回りに、文字通り当たり前にある
 言葉です。そして、当然だとか、
 常識的にそうだとか、そうあるべき
 だといった意味で私たちは使っていま
 す。しかし、大震災被災地を見舞っ
 たアルシンドさんのように、「友だち
 なら当たり前」と言って、実際に行
 動できる人は少ないような気がいた
 します。逆に「受験生なら当たり前
 でしょ。」なんて言うのと、反感を買っ
 てしまうのが落ちかもしれませぬ。

□□□読経

圓福寺に、毎朝のお参りにやって
 くる中国人男性がいます。毎朝一
 緒にお経を読んで、出勤時間が遅い
 時には、読経の後に坐禅をしてから
 仕事に出かけています。土日になら
 ず、坐禅の後に庭掃除をして帰って
 いかれます。

そのお仲間の中国人もときどきお

寺にやってくるのですが、ある時ハッ
 とすることを言われました。

「私は、文殊菩薩の信者ですけど、
 文殊菩薩のお経を本堂であげても
 いいでしょうか？」また別な人は、
 「私は観音菩薩の信者ですから、観
 音様のお経を読ませていただきます
 ます。」

また別の日、懇意にしている台湾
 のお坊さんと一緒に来られてお参
 りをしたいとおっしゃいました。本尊
 様はどなたですかというので、お釈
 迦さまですというので、お釈迦さまの
 お経を読ませていただきますと、お
 そらく普段読まれていないお経なの
 だと思いますが、おもむろにスマホ
 を取り出して、スマホにお釈迦さま
 のお経を映しだして全員でお参り
 をしていきました。

四国歩き遍路をしていると、札所
 でいっしょになる団体さんがいます。
 そのお経を聞くと、真言宗のお参り
 の仕方だとわかります。そして、札
 所ごとの本尊様の「真言」を唱えら
 れます。普賢菩薩なら「オン サンマ
 ヤ サトバン」、観音様なら「オン ア

スマホ見ながら読経。その手があったか・・・。

ロリキャッソ
 ワカ」など、
 仏様ごとの
 真言が決
 まっているの
 です。

私たちの

臨済宗の場

合は、真言といわれる呪文を唱える
 ことはあまりありません。毎朝のお
 勤めでは、観音経を読み、般若心經
 を読み、大悲呪、開甘露門などをお
 読みします。そして、ご回向の中
 で、お釈迦様や本尊様の名号をお
 読みしたり、祖師のお名前をお読み
 いたします。

仏様ごとのお経が決まっていると
 か、真言が決まっているとかにかかわ
 らず、また国や宗派が違っていても
 「仏教徒ならお経を読むのが当た
 り前」、「仏教徒なら合掌するのが
 当たり前」、そんなこと今さら言わ
 れなくても当たり前。とはいっても
 のアルシンドさんのように行動に移
 すことができるか、お経を実際に読
 んでいるのが肝心なところです。



□□□仏道無上誓願成

数あるお経の中に仏教徒のスロー

しぐせいがんもん

ガンをまとめた、「四弘誓願文」という短いお経があります。その四番目

ぶつどうむじょうせいがんじょう

に「仏道無上誓願成」と説かれています。私たちが歩む仏の道は限りがないものですが、必ずや成就することを願いますと唱えるのです。これをわかりやすく言えば、「『仏教徒なら当たり前前!』のことに実践すること」にほかなりません。

臨濟宗の祖

である臨濟禅師は、「飢え来れば飯を喫し、困じ来れば即ち眠る。」と説かれていす。腹が減ったらごはんを食べ、疲れ果てたら眠る、その当た

り前のことのように、仏道を歩みなさいと導いてくれています。

また、「当たり前前」は、自分にとって何が大切な事なのか、その時々何をするのが一番なのかを気づかせてくれる言葉でもあるような気がいたします。

「少水の魚に楽しみ有り」と微妙大師がおっしゃいました。もう年だから無理とか言わずに、今日から「○○なら当たり前前」に取り組んでみてはいかがでしょう?きつと少水の中に楽しみを見つけることができると思います。



四国の札所では、全員で般若心経を読みます。



最強の二六二字・般若心経

第四回——広大な「空」^{くう}の中で生きる

般若心経の解説の第四回、今回は

「舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不增不減」

を取り上げます。

般若心経の根幹の部分である「空」の考えを繰り返し繰り返し説いています。今回の内容では「空」考え方がどんどん広がっていきます。「空の考え方があるんだな」と思っていただきつつも普段の生活の充実につながっていただけだと思えます。

□□□ 舍利子

再度観音菩薩が聴衆の代表であるサーリプトラさんに話しかけます。

□□□ 是諸法空相

「是のように諸々の法は空の相(性質)があるので」と訳します。ここで「法」という言葉が出てきました。こ

れは法律という意味での法ではなく、仏教用語です。古代インド語では「ダルマ」といい、法則や真理、教え、存在、すべての自然現象を指します。「ダルマ」と言っただけイメージするのは、もちろん「だるまさん」のことかと思えます。だるまさんの名前の由来もこの「法」から来ています。ここではすべての自然現象のことです。ですので、ここでは「すべての自

然現象は空の性質があるので、」と訳されます。ここでいったん空というものをもっと簡単に振り返りますと、端的に言う「特定の実体はない」という性質となりまして、言い換えると「単体では存在できず、他のかかわりあいによつてはじめて存在できる」という性質です。人間はそれぞれのパーツがあつて、さらに誰から産まれた何を食べた誰と関わったとかそういう複雑な情報の重なりあつた状態に過ぎず、人間という特定の実体はないのだということをお前の寺報では申し上げました。そのた



圓福寺のだるまさん



め、この節の「是諸法空相」では「すべての自然現象は実体はなく、様々なものや現象の重なり合いに過ぎないの」と訳されます。

□□□ 不生不滅

前の節の引き続きで、すべては空で実体はないから、「生まれるということもなく、滅するということもなく」と訳されます。人で考えても、どこからが生命か、どこからが死かということもなかなか難しい議論なところもありますが、ここでは空という概念から見たお話です。これは海の表面にある波をイメージするとわかりやすいのかもしれませんが。我々の体というものには先ほどの空の話でもあったように様々な要因の組み合わせによってできているものです。同時に海の表面の波も様々な細かな波の積み重ねによって、大きなうねりの波ができています。その



波が我々の体ということとです。空の考えからすると、我々の体というのはいのちの海の上の波のようなもので、とても儚いものです。そ

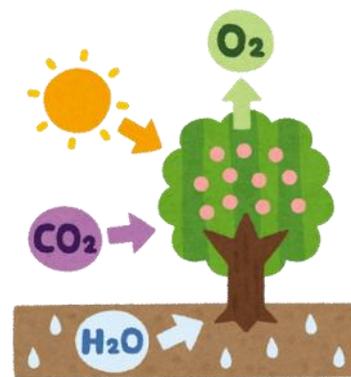
して海水はこの世界のすべての物や現象です。限りなく広い海の表面で波が生まれたとか滅したとかは何とも言えないことがわかります。ですので、空の考えの上では我々の体を含め、すべての物は「生まれるということもなく、滅するということもない」といいます。

同時に人間を含めすべての物や現象は生まれるでも滅するともいえない大きな海の中にあるようなものです。その大きな海のことを法身(ほっしん)とも仏教では言います。

一つ、禅宗の公案を紹介します。現在の中国で宋の時代、大竜禪師という老師に対して、ある修行僧が質問しました。「形あるものは滅びるものはずですが、法身とは何ですか?」。それに対して大竜禪師は「山花開いて錦に似たり、澗水湛えて藍の如し」(碧巖録88則)と答えました。この大竜禪師の言葉は「山の風景を見ると、高級な織物を広げたように美しい花が覆っており、谷を流れる水はあふれ出て、藍のように美しい色を成している」と訳せま

す。ここで大竜禪師が言いたかったことは、きれいに咲き誇る花もいづれは枯れて落ちるし、きれいな水が流れているように移りゆかないものはない、その自然の営みのすべてという広大な範囲と見れば不生不滅の法身で





あるということかと思
います。そしてこの不
生不滅の花や
水というのは我々人
間と同じで儂いものではあるのです
が、不生不滅の上であってこの上
ない美しいものでもあるのでないで
しょうか。

□□□ 不垢不淨

「汚くもなく、綺麗でもなく」と訳
します。これは「是諸法空相」から
掛かったことですので、「すべての自
然現象は空の性質があるので、汚く
もなく、綺麗でもなく」となりま
す。不生不滅の話と同様に、波のか
たちを考えてみます。大きな海の上
には波は無数にもありますが、どの
波が汚い波なのでしょう。どの波が
きれいな波なのでしょう。そう考
えると、汚い・綺麗など区別がで

いことがわかります。どの波もそれ
ぞれ立派な波です。そのため空の考
えから見れば、すべての物・現象は
汚いも綺麗もなく、不垢不淨であ
ることがわかります。確かにものや
現象には汚い・綺麗はあります。し
かしその考え方は人間の価値観に
よって決まるものです。その人間の
価値観というちっぽけな目線から離
れた目線が空の目線から見たもの
の見方です。先ほどの「山花開いて
錦に似たり」のような、花が咲き誇
る山の風景を思い返してみますと、
花や葉はいつか朽ちて落ちるでしょ
う。しかしその落ちた花や葉が養
分となってまた次の季節の花や葉を
彩ります。そう考えたときに落ち
た花や葉は汚れでしょうか。逆に咲
き誇った花や生い茂る葉は単純に綺
麗なものなのでしょうか。そう考え
たときに再度、空の考えから見たら
不垢不淨で、汚いということもな
く、綺麗ということもないといえるの
ではないでしょうか。

しかし、現実問題、普段我々が生

きていくうえで不垢不淨の考えだ
けで生きていくわけにはいきませ
ん。例えば家の中が埃だらけ、ゴミ
まみれであったときに「空の考えから
すれば汚いもなく、綺麗もないのだ
からこれは掃除をする必要はない
！」などと言っておりましたら、家
族中・近隣中から反感を買いまし
し、不衛生です。家の中は綺麗であ
るに越したことはありません。普段
の生活秩序・道徳を守ったうえで、
この空の考えというものがあること
で、心の中に少しだけ平穩が垣間
見え、おらかな気持ちが生まれ
るといふことだと思えます。

□□□ 不増不減

同様に、すべての自然現象は空で
あるから「増
えもせず減
りもせず」と
訳されま
す。また大
きな海の表
面の波をイ



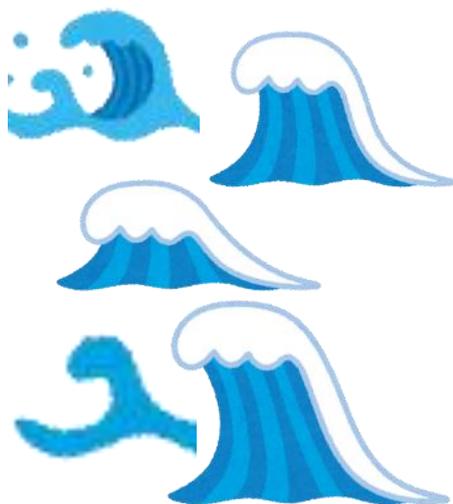
メージします。波が一つ立とうとも、二つ立とうとも、広大な海自体は増えもせず、減りもしません。ほかにも外でシャボン玉を飛ばした時を考えるとシャボン玉が一つあろうとも二つあろうとも、逆にそれがはじけようとも、広い外の空気というのは不増不減です。

■ ■ ■ 今回のまとめ

ここまで「舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不増不減」を解説してまいりました。すべての物や現象というのは空であって実体が無い、そして周りの物とのつながりによつて形成されている。という前回の解説を振り返りつつ、今回は我々というのは海の上の波のうねりのようなものであるということを書かせていただきました。波のうねりのようなものであるから、生まれるということもなくなり、死ぬということもなく、汚いということもなく、綺麗ということもなく、増えるということもなくなり、減るといふこともない、と解説さ

せていただきました。様々な般若心経の解説書を見ますと、私が例えに出した海と波の例えの海の部分自体を「空」であったり「一」といつているものも多く見られます。ですので、広大な宇宙空間に広がる「空」の中で形作られているのが我々人間ということになります。非常にちっぽけな存在であるように思いますが、「山花開いて錦に似たり」です。ちっぽけで儂いような我々人間ですが、精いっぱい咲かす花のように、精いっぱい生きることの素晴らしさがあるのだと思います。

(次号に続きます。)





四国八十八ヶ所 巡 終

市原市 宮本和敏

八十八札所を巡り終えたのを機にあるき遍路の旅を振り返ってみます。

二〇一五年二月、高野山に参拝。第二巡目最後の四国あるき遍路の旅に加わったのが最初でした。翌年十一月から徳島の一歩札所を皮切りに三巡目が始まり、十三回の遍路旅を重ねて二〇二四年一月結願に至りました。二〇二五年二月高野山にお参りして、待望の満願になります。生前から四国遍路を強く勧めてくれました母の霊前で八十八ヶ所の巡礼を無事に終えたことを報告し、改めて感謝を伝えました。大変うれしく思いました。

全十三回遍路旅の延べ日数は三十九日(初回の高速バスの移動を入れるとプラス一日かも)、山の上下りを度外視すると歩いた距離は六百km

余り、かいた汗は計り知れませんが、もし自分一人でも企画、実行するとなるとたいそう遠大な事のように思え、とても八十八札所の巡礼を成し遂げられなかったことでしょうか。最後までお導き下さったご住職、副住職さんに対し感謝至極に存じます。



八十八頁の全てが御朱印で埋まった納経帳を前に様々なこと思いが湧いてきます。まずは自分のことです。十年ほどの間、健康と体力が維持できて、毎回必ず参加出来たこと。日頃から車をなるべく使わず歩くことに努めてこられたこと。特に遍路の旅が始まる二ヶ月ほど前から準備のつもりで連日歩くことを重ねてこられたこと。四国遍路とは四国だけにあるのではなく、自分の日常

生活の中にもすっかり根付いていたことを実感します。家族が「頑張っておいで」と送り出してくれたこと。ここまでの環境が整わなければ、参加される皆さんとの出会いはありません。道中、励まし合いながら歩いた皆さんとの出会いは幸いでした。その時々思い出はたくさんあります。

八十八ヶ所の札所を巡り終えると広い伽藍の立派な佇まいのお寺、い



三回目で泊まった古民家遍路宿「蔵空間」茶館」

かにも質素で参拝者が少ない様子のお寺といろいろでした。果たしてどこがナンバーワン？ 実はお参りしたのお寺もその時どきの思いをもって手を合わせ、それぞれがオンラインワンの貴重な体験でした。宿泊した宿も様々でした。ビジネスホテルのこともあります。宿坊で早朝皆で揃って本堂でお勤めをするのは何にも代え難いことでした。土佐の古民家遍路宿もたいそう印象深い宿でした。また、夕食後の大部屋で皆で焼酎を飲みながら談笑するのはその日の疲れを忘れる楽しいひと時でした。お接待で温かいコーヒーを頂いて有難かったこと。宿ではおいしい刺身を頂いたこと。栗焼酎も忘れられない味でした。高知の海鮮市場での鰹のタタキの美味しさは格別の味でした。既に椿の花が落ちた長い道を歩いて岬の突端にあるお寺にやっと辿り着いた達成感。実は、三日間でお参りしたのは足摺岬の突端にある三十八番札所金剛福寺だけというのもあるき遍路ならではの貴重な経験でしょうか。ランチはコ

ンビニのおにぎりのことも多かった。ところが石鎚山登山口に近い無人駅前のイタリアンレストラン。日曜日ということもあって行列ができていました。そこで頂いたロールキャベツは絶品でした。田舎ながら行列のできるレストランに予約ご心配頂いた和尚さんのお心遣いにたいへん嬉しく思いました。険しい山の上でいきなり吹雪にあい、十一月というのに摂氏三度の気温を体験出来たこと。讃岐での昼食は毎回うどんだつたこと。讃岐の山道脇にある景子ちゃんのお接待所。小児がんのため六歳で夭折した景子ちゃんのお父さんが二十三回忌を終えてあるき遍路を始めたとき、小児がんなどの支援団体仲間が設けた接待所。リングジュースを一缶頂戴しました。

結願所の大窪寺はこの札所だけにお参りに見



小松駅前、イタリアンの「マルブン」



える参拝の方
も多くおら
れることで
しよう。しか
し徳島から
巡って来られ
て、最後に八
十八番に辿
り着かれた
方もおられ
ます。カナダ

人で「妙礼」と名乗られた女性はお
よそ一ヶ月半を掛けて大窪寺まで
来られ、電車・バスを乗り継ぐも数
百キロを歩いて辿り着いたと話され
ました。大きなリュックを背負ったフ
ランス女性はテントで寝泊まりしな
がら一番から巡って結願寺まで来
られた由。大窪寺ではつい先ほど
会ったイタリア男性お遍路さんとも
親しく言葉を交わしました。コロナ
以前に比べて外人お遍路さんが増
えているように思います。三人の外
国人お遍路さんと一緒に記念の集
合写真に納まりました。圓福寺の
益々の国際化に伴い今後ホームペー

ジの多言語化が必要
になることでしよう。

あるき遍路の旅を
十三回重ねる間には
多少の失敗もありま
した。しかし概ね平
穩無事に終えること
が出来たのは充分過
ぎる程ご配慮下さい
ました圓福寺ご住職
のお蔭と感謝この上も
ございません。唯一た
いへん残念に思います
のは、住職の奥様尚美
さんが集合写真に登
場するのは第七回が
最後になったことで
す。第八回目はご自
身のご都合でご参加
出来ませんでした。が、
誰しもその後はご一
緒頂けるものと信じ
て疑いませんでした。
しかしながらご参加
されることは一切望
めなくなりました。た



今回結願した八十八番大窪寺にて

左からイタリア人・カナダ人・日本人・宮本さん・フランス人

尚美さんの最後の四国歩き遍路。第七回四十二番仏木寺にて。



いへん悲しく、残念な思いでいっぱい
です。二〇二〇年第八回目の遍路
旅を終えて間もなく四月には新型
コロナウイルス流行のため、緊急事
態宣言が発令されました。日本中
が静まり返り、人の往来もなくな
りました。やっと再開できた第九回
目は二〇二二年十一月でした。以
後、集合写真に写ることのない尚美
さんは和尚さんの傍で寄り添ってご
一緒に山道をお歩きになっているこ
とでしょう。

三巡目の遍路旅を終えて、最初か
ら一貫して変わることのなかった風
景がありました。泥で汚れた草鞋
と寒さのためか赤くなった和尚さん
のお御足です。自分は温かい靴下で
包んだ足にトレッキングシューズを履
いていて、果たしていいのだろうか
思いながらも、次回から草鞋に変
えようとする勇気もなければ、お
しろその気もない。そんな思いを隠
したまま、毎回お二方のお足元を
見ながらそつとお御足に心の中で手
を合わせる次第でした。

来年は高野山でお礼参りをした
後、その後は四国あるき遍路四巡
目が始まります。新しい方々の参
加も得て今後も続けていかれること
でしょう。これからも四国あるき遍
路記録集を拜見できること楽しみに
致しております。

—— 2024年12月5日 ——

軽い・安い・蒸れない・全天候型トラディショナルサンダル (©ミカナダ人)



7回目、齒長峠を下り
たところで、右の鼻緒が
切れてしまいました。は
ながではなおがきれた。





八幡圓福寺老師歷住開堂

令和六年十一月四日

副住職が修行中に師事していた、京都府八幡市の圓福僧堂の住職である、龍潜窟政道徳門老師が本山の妙心寺にて歴住開堂という式を執り行いました。歴住開堂とは本山の仏法を継承して法堂にて説法をする儀式です。平たく言うと妙心寺派の管長を一日だけ勤め、僧侶の階級を歴住職という位に上げるといふ儀式です。これにより紫衣よりも位の高い緋色の衣を身につけることとなります。

私、副住職がお世話になった老師の晴れ舞台の大事事ですので、十月二十八日から十一月六日まで、お手伝いに行かせていただきました。

法要

当日は妙心寺内の東海庵から出發していったん南門から外へ出ます。それから勅使門という普段は絶対に開かない門から入り妙心寺内の各所にて法要・偈（漢詩）を唱えて回ります。一番の見せ場は法堂における拈提（ねんてい）という偈をお唱えして説法をする場面です。長い説法のあとにキモとなる一言を唱えて終わりになります。そのキモとなる一言は昔の中国の禅僧の禅問答にちなんだものになるのですが、どの一言を選ぶかが、老師の修行の深さを物語るものですので、だれもが注目する言葉になります。

そしてそのキモとなる一言が
 「本来無一物
 何れの處にか埃塵を惹かん」

でありました。

本来無一物

これは中国の慧能禪師という方の有名なお言葉から引用したものになります。慧能禪師は達磨さんから数えて六番目の継承者で、「六祖」とも呼ばれ、カリスマ的なエピソードが沢山残っております。現在中国の広東省の南華寺で即身仏として祀られています。「本来無一物」は慧能禪師が残した言葉で、先輩の僧への反論です。先輩の僧は「ちゃんとした身体と心を整えた先に菩提（悟り）がある」と言ったのに対し、慧能禪師は「ちゃんとしたとは何ですか！人は皆、生まれた時から今まで煩惱があっても、あるがままの姿が



三十三祖慧能大師

慧能禪師（六祖）

姿が



「本来無一物」
政道徳門老師ご染筆

菩提じゃないですか！」という意味を込めて詩を残したことになりました。昨今では転じて、「本来無一物」の意味は「生まれたときは皆何も持っていないかった」と同時に死にゆくときも「無一物」で何も持たずに死にゆくことはできないという意味で使われることが多いです。確かに生まれるときは何も持たずにゆくときは何も持たずに死にゆくことはできません。どんなに生前に財産や地位や友人がいようと「無一物」です。

歴住開堂の老師



の「本来無一物」の意図を私の拙い解釈で恐れ多くも言うならば、「いくら歴住という高い位になれども、死ぬときは裸一貫、一般の皆さんと何も変わらない一人の人間なんだ」ということかと思えます。この世の無常感を示すと同時に平身低頭の謙虚な姿勢を示したのではないかと拙い私の視点ながらに思ったのでありました。歴住開堂の一端に携われたことを非常に光栄に思っています。





寺庭追悼茶会

寺庭宮田尚美を偲んで



三年前の十一月二十六日に亡くなった寺庭(住職の妻)の尚美を偲び、十一月十三日に寺庭がお世話になった川村先生をはじめ、お茶仲間の皆様をお招きして追悼茶会を行いました。圓福寺で毎月行われる茶禅会の小林さんと奥山さんのお二方が中心で運営がされ、お点前を副住職が行いました。使われたお茶道具の品々は寺庭が生前買い揃えていた思い出の品ばかりで、参加者一同でお茶を通じて寺庭の思いに浸る感慨深い時間になりました。



法要が終わり、お茶会へ入る挨拶

追悼法要

書院への席入り後、追悼の法要を行いました。お茶会のレイアウトに加え、書院の片隅に寺庭の写真飾って法要をするという、普段にはない形でした。追悼茶会ということで、寺庭と一緒に、お茶会をするという心持ちを整えて、お茶会に臨みました。

お点前



お点前をする副住職

法要が終わり、お菓子が皆さんに運ばれ、いよいよお点前です。今回お点前をするのは茶道経験の浅い私、副住職でした。お茶の老先生でいらっしゃる川村先生をはじめとする皆様方の前で拙いお点前を披露するのは少々緊張しました。皆様の温かい雰囲気^{こいぢや}に助けられつつ、「続き薄」という濃茶と薄茶をお出しするというお点前でした。薄茶は一般的にイメージする抹茶ですが、濃茶とはペースト状の抹茶でドロツとしたものことです。これらを不慣れながらも丁寧に丁寧に点てて皆様にお出ししました。

です。これらを不慣れながらも丁寧に丁寧に点てて皆様にお出ししました。



濃茶



薄茶

拝見

お茶会でつきもののなのが、道具の拝見です。どの道具も寺庭のこだわり^{こたわり}の品物ばかりです。その中からここでご紹介したいものが「和氣満堂」の軸です。

「和氣^{わけ} 堂に満つる」と読みます。意味は「和やかな雰囲気^{ふんい}が建物に充滿する」という意味です。これは寺庭の好きだった言葉で、寺庭の戒名（喜徳院和氣宗尚大姉）にも使われている言



「和氣満堂」

平林寺圓應老師ご染筆



葉です。寺庭の人柄でお寺が和やかな雰囲気^{ふんい}になっていたことを思い出します。お茶会の雰囲気も「和氣堂に満つる」ように寺庭の雰囲気^{ふんい}に抱かれるように和やかな時間を過ごすことができました。ご参加・ご協力いただきました皆様、ありがとうございました。

合掌

圓福寺栗ひろいツアー

圓福寺9月の土曜会



九月の圓福寺の土曜会はかすみがうら市のチヨダ園芸さんにて栗拾い、引き続き寺院巡りでした。気持ちのいい秋の気候の中、秋の味覚を満喫しました。



チヨダ園芸
 栗拾いだけではなく梨狩りやサツマイモ堀りなど収穫体験多数。他にもドッグランやキャンプ場なども併設しており、店員さんがとても親切。



チヨダ園芸さんの入り口
 (かすみがうら市中佐谷744 - 1)

栗拾いが楽しみ。さて持参の軍手と農園用意の籠と長めのトングをもって栗林



円福寺土曜会の栗拾いツアーに参加しました。暑さ寒さも彼岸までと言いますが、秋めいた九月二十九日薄曇りながらの行楽日和。一行九名住職、新命さん以外は殆ど初体験。
 栗出荷量日本一の茨城県はかすみがうら市のチヨダ園芸さん。ここは栗だけでなく梨、芋、柿、ブドウも栽培とのこと

幕張町 雨海宏明

「八十歳初めての栗拾い」



豊作の栗林



に出発。
栗の木には十センチ位のイガが沢山実ってます。これはまだ未熟とのこと。熟すと自然に地面に落下すると。たしかに作業中ドサッと落ちる音がします。梨狩り、ブドウ狩りといいますが栗は「拾う」という意味が解りました。ま



大量の栗にご満悦

ず地面に落ちていいるイガを両足で踏みつけると中に二、三個の栗が覗きます。それをトンクで取り出して籠に入れます。絶対に手で掴まないように繰り返し注意を受けた。最初は小さかったり傷んだものまで籠に入れましたが、慣れてくると艶のよい丸々とした栗だけを採集した。一時間二十分ほどでお願いします。事務所では計量し支払い？入場料とは別に一キロ一〇〇円で各人が採集した栗を購入するシステムです。三〇〇〇円近い人から一〇〇〇円程度までそれぞれ。頑張った人ほど大口購入者となる仕組みです。昼の弁当を食べながら茹で栗、蒸かし芋、柿、梨を試食。食べ放題ですが高齢者は多くは食べられませう。皆さん面倒な栗よりお芋のほうが好評。「くり（九里）より（四里）うまい十三里」という江戸時代からの焼き芋屋の幡を思い出しました。

帰途、雨引観音（樂法寺）と



秋の一日を企画した方、往復の運転を引き受けた副住職ありがとうございました。
なお土産の栗は立派な栗と家内より誉められ、翌日の栗ご飯をととても満足しました。



雨引観音（樂法寺）の山門

椎尾山薬王院の二か所の古寺を清々しい気持ちで参拝しました。
なお恒例の打ち上げ会を中華料理店で堪能しました。楽しい

(9月の「園だより」から)

秋の風物詩？

夏の忙しさの合間を縫って、ネイチャーランドに出かけては、年長さんの豆畑やさつまいも畑の周りの草刈りに精を出しました。

暑い日が続いたので、稲の成長も早かったようで、お盆前から稲刈が始まっていました。農道を走りながら、コメ不足だというから早く収穫してね、と祈りながらネイチャーランドを目指しました。

稲刈といえば秋の風物詩だと思っていたのに、気候変動のせいで、夏の農作業のように変わった気がいたします。

また、秋の味覚といえば、「クリ」を一番に思い浮かべる人もいると思います。といっても、山で拾った生ぐりの食感やゆでぐりの香りな



んかより、「モンブラン！」と声を上げる人が多いかもしれせん。

その「クリ」が、ネイチャーランドの「たわわの森」に、文字通りたわわです。このクリもまた、夏の味覚に変わりつつある感じがいたします。

秋の味覚が夏の味覚に変わったとしても、子どもたちには栗拾いを体験してもらいたいと毎年思います。そして、固い皮をようやくむいて、根気よく渋皮をそぎ落として、やっと口に入れられた生ぐりのカリカリした味、茹で上がったばかりの栗をほじくって口に入れた時のおいしさを味わって貰いたいと思うのですが、幼稚園は二学期が始まるやいなや運動会の活動に突入してしまうので、残念ながら今年も子どもたちが栗拾いに興ずることはないようです。



今年の暑さは10月まで持ち越すとも言われています。夏の甲子園の高校野球も暑さを考慮して二部制になったり、休養日を設けたりと暑さ対策をしたようです。運動会もまだ暑い10月にやったら夏の行事になってしまうかもしれません。これからさらに気候変動するようだったら、秋の風物詩としての運動会の日程を変更せざるを得ない時期がやってくるかもしれません。

そうなれば、子どもたちが「たわわの森」でクリ拾いに興ずることができるんだけどなあ。とはいえ、年間行事の変更は、ほかの行事との兼ね合いもあるので、残念ながら一朝一夕には変えられません。せめて、秋の味覚として栗ご飯でも食べさせてあげようかな。

土曜会

この集まりは、圓福寺にご縁のある人が、各種体験などをしながら懇親・談笑する自由空間です。たくさんの方の縁が広がります。

【期日】

- 一月十九日(日) 花園会新年会
- 二月(未定) (未定)
- 三月(未定) 春彼岸法話会
- 四月二十六日 歩禅会(香取?)
- 五月二十四日 市原ボランテラ
- 六月二十一日 仏教シアター
- 七月二十六日
- 〃二十七日 禅童会お手伝い
- 八月二十三日 地藏盆お手伝い

【申込】

参加費など詳細は、行事ごとにご案内いたしますので、奮ってご参加ください。



写経会

般若心経を写経いたします。大きめな字でお手本が印刷された、とても書きやすい写経用紙を使用しています。お道具の準備から毛筆の基礎なども親切にご指導いたします。

【前期期日】

- 二月二日
- 三月二日
- 四月六日
- 五月十一日
- 六月一日

【後期期日】

- 六月二十九日
- 八月三日
- 九月七日
- 十月五日
- 十一月九日

【時間】

午前十時～十二時

【会費】

一期五回で、花園会員三千円

会員外 五千円

【講師】

齊藤 加代子先生・住職

【用意するもの】

小筆、硯、墨、半紙

【定員】

二十名

【申込】

お寺までご連絡ください。



体験写経

上でご紹介の写経会の体験版をご用意いたしました。写経にご興味を持たれても、いきなりの写経会参加に不安のある方は、一度上記の写経会を体験してみたいかがでしょうか。お道具などもお寺でご用意しますので、手ぶらで気軽に参加することができます。お申込み・お問い合わせは、お寺までお願いいたします。

【参加費】一回 千五百円

体験坐禅

坐禅をやってみよう！でもむずかしそうだなあ、と思っている方に、初心者向けの「坐禅体験会」を行っています。

【期日】原則として毎月第二火曜日

【時間】午後七時～八時

【内容】坐禅の説明・坐禅体験・茶話会(抹茶とお菓子)

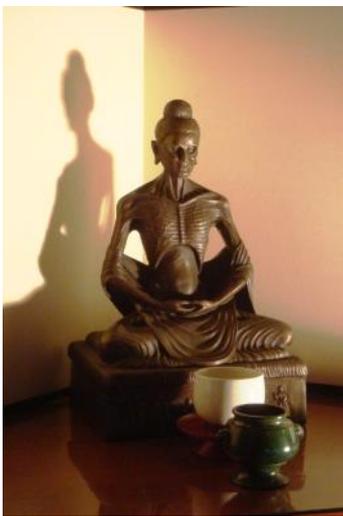
【費用】五百円

【申込】電話・メール・ファックスなどでお寺までご連絡ください。

令和七年
間行事予定

5月	4月	3月	2月	1月
24日	26日 8日	17日～23日 9日	14日～16日 5日	19日
土曜会 市原ボランテラ	土曜会「タケノ」掘り 降誕会(花まつり)	春彼岸 彼岸会法要	三巡目の第十四回 四国あるき遍路の旅 涅槃会	花園会新年会
	春彼岸の合同法要を、本堂にて執り行います。あらかじめご案内を差し上げます。		お釈迦様のお亡くなりになった日。涅槃図の掛け軸を掛けて法要をします。	二十四ページのご案内をご覧ください。
				仏教興隆・国家安泰・五穀豊穣・檀信徒各家の繁栄などを祈禱する法要をしています。この修正会で祈禱した「般若札」は、寺報・カレンダーなどと一緒、みなさまにお届けいたします。

10月	9月	8月	7月	6月
5日	13日	23日	26日～27日 11日～16日	21日 6日
達磨忌	土曜会	地藏盆	圓福寺寺子屋「禅童会」 七月盆の棚経	土曜会 仏教シアター 山門施餓鬼会
禅宗初祖「達磨大師」の命日。		子どもたちの楽しいお盆の行事です。夜店や野点・ゲーム大会などで盛り上がる夜祭りです。併せて、地藏盆の法要で水子・ペット・人形供養も行います。	一泊二日の子どもたちの坐禅会です。坐禅だけでなく、楽しいゲームやいろいろな体験もできます。たくさん参加を待っています。	初盆の仏様はじめ、檀信徒各家の仏様の施餓鬼会を致します。あらかじめご案内を差し上げます。
		八月盆のお宅に棚経にお伺い致します。	七月盆のお宅に棚経にお伺い致します。	



釈迦苦行像【圓福寺蔵】

12月	11月	10月
31日 20日	8日 14日～16日	26日 未定
年越しまいし 歳末ボランテラ 花園会忘年会	成道会 四巡目の第一回 四国あるき遍路の旅	土曜会「涅槃寄席」 市原別院収穫祭
あまぎけ・般若湯・年越しそば・福だるま・お守り・新春祈禱など、たくさんお参り下さい。	お釈迦様がお悟りを開かれた日です。	永代供養の方々の法要と、生前戒名の授戒会。
		涅槃精舎毎歳法要 布薩会



——圓福寺では、毎年、和やかな楽しい新年会をしています。たくさんのお越しをお待ちしております。

圓福寺とご縁のあるみなさんは、千葉という地域柄、全国各地のご出身の方がほとんどです。北は北海道、南は九州沖縄までという決まり文句の通りです。

石川啄木がふるさとの訛りを上野駅に聞きに行きましたが、圓福寺の新年会に来れば、全国のお国言葉を聞くこともできます。

どうぞ、お気軽にお寺の新年会にお出かけ下さい。



令和7年
西曆2025年
仏曆2568年



圓福寺
住職 宮田宗格
副住職 宮田宗耕
圓福寺花園會
会長 平山 実
福田 和夫
塚本 勝身
西川 浩平
吉村 利晴
手塚喜久子

日時 一月十九日(日)
午前十一時 新春ご祈禱
正午 新年懇親會

会費 三千元
(ご祈禱料、お守り、お膳・飲み物代を含みます。)

申込 電話・ファックス・メールなどで、お寺までご連絡下さい。

会費は当日受付です。